

本号のテーマ：「バランス…畏れず、されど侮らず」

今年度も既にいくつかの学校訪問を終えたが、そこで感じたことは、新型コロナ禍に揺れる世間とは別世界のような、穏やかで明るい日常が学校にあったということである。もちろんそれは、3密を避けるための工夫や絶え間ない消毒作業といった学校職員等のそれこそ目に見えない努力に支えられたものだが、「命は何よりも大事」という異論をはさむ余地のない標語のもとで、3か月間という長期間、子どもたちが学校に通い、学び、触れ合い、共に成長する場を奪うという前代未聞の経験を子どもたちに強いた大人の一人として、こうした日常生活を目の当たりにしたことは、何かしら安ど感を覚えるものであった。

そんな折、5月29日のNHK総合「知るしん」で放送されたC・W・ニコルの提言「新型コロナ時代をどう生きる？」の録画を見直した。私がまだ40代で青少年教育にかかわっていたころ、蔵王の研修所で直接ニコルさんから話を聞く機会があり、大きな体と優しい笑顔、そして様々な経験から紡ぎ出される迫力ある言葉に圧倒された。そして、信州黒姫山のふもとで35年にわたって森の再生に取り組み、4月に亡くなられたが、生涯かけて、「人と自然のバランス」を訴え続けた人であった。

そのニコルさんが、亡くなる直前、「毎日ウィークリー」3月28日の連載コラムで「免疫、隔離、そしてバランス」という言葉を残した。「生命体はあまねく素晴らしい競争の中にあります。カモシカと草 カモシカとライオン アリとアリクイ。食べる側 食べられる側の間にある戦争はウィルスも同じです。ウィルスから私たちが身を守るにはまず免疫をつけることです。その上で感染者を隔離する努力は当面は必要でしょう。しかし強制を伴う隔離は長く続けることはできません。そうした中で私たちに今求められているのはバランスなのです…すべての命は唯一無二の存在だが、お互いに結びついています。私たちは今こそ尊敬と謙虚さを学ぶ必要があるのです。」

この提言を受け、解剖学者の養老孟司氏は、「ウィルスを排除する社会から、ウィルスと共存する社会への転換」と言い、地域エコノミストの藻谷浩介氏は、「間合いを取りながら、対処するところは毅然と対処し、しかし、過度に怖がらずに行動できる」とし、脚本家の倉本聰氏は、「いまの日本の経済至上主義の価値観を変えるべき」と言います。

3カ月に及ぶ学校休業が子供たちの学力に、身体に、そして心にどのような影響を及ぼしたのかは、私たちは今、定かには知ることはできません。しかし、私たちは今後もウィルスと向き合っていかなければなりません。だからこそ、ウィルスに勝つことを目指すのではなく、自然を敬い、私たちも淘汰を繰り返しバランスをとってきた

自然の一部なのだという謙虚さを身につけ、自然と命、命と経済、経済と文化の共生を図る社会への志向を明確に子どもたちに示し、共に歩んでいくべきなのだと思います。